

札幌の造園会社就職の橋本さん 高校の経験を糧に

# 庭造りの道へ 住民の笑顔励み

「高校入学時はまさか造園の世界に進むとは思っていなかった。今は毎日楽しくて仕方ない」。4月に札幌市厚別区の四宮造園に入社した橋本大夢さん(18)はほほ笑んだ。将来の目標をたてないまま入学した当別高園芸デザイン科で、庭造りの達成感と地域の人に喜ばれる充実感を知った。真新しい作業着姿で「いつか人々が集まる公園を手掛けたい」と張り切っている。

(上野香織)



橋本さんは12日、札幌市中央区のマンション前で立ち木の冬囲いを外していた。手際のよい先輩社員と比べ、手つきはどこかぎこちない。だが「吸収しようとする思いは強く先」先々のことを考えて動く先輩を見て勉強します」と語った。町の白樺コミュニティセン

## 「集いの公園手掛けたい」



ターの花壇を整備する町の事業に、同級生4人と参加したこと。京都の龍安寺を参考に、雑草だらけだった花壇を白い化粧石を敷き詰めた日本庭園に作り替えた。昨年10月の完成時には、地域住民から「きれいだね」と喜ばれ「人のために役立ちたい」と造園会社で働く思いを強くした。3年の時には国家資格の3級造園技能士の資格も取得した。

先輩の指導の下、マンションの立ち木の冬囲いを外す橋本大夢さん。「生き物相手なので神経を使います」と真剣な表情を見せた(藤井泰生撮影)

く、経験者に比べて新卒者の採用は少ないという。担当の東穂公洋教諭は「打たれ強く努力家の橋本君だから就職できた。彼なら後輩のために道を聞いてくれるだろう」と話す。

今は、先輩社員とともにマンションなどの現場を回り、主に立ち木の冬囲いを外す作業をこなしている。かがむ姿勢が多く筋肉痛に悩まされるが「そんなこと気にしてられない」という。就職を機に実家から会社近くの厚別区に引っ越し、炊事や洗濯も一人ですすめようとしている。

夢は人々が集まる公園の整備や管理に携わること。入社早々、胆振管内白老町に整備されるアイヌ文化復興の拠点「民族共生象徴空間」の予定地で、サクラの植え替え作業を経験させてもらった。「世界中から観光客が集まる場所に関わることができて光栄だった。オープンする3年後の春、一人前になって公園を見に行きたい」。そんな自分の姿を今から思い描いている。